



TITLE:

天降の靈劍-建國劍：世界の至寶-流星刀

AUTHOR(S):

村山, 翠溪

CITATION:

村山, 翠溪. 天降の靈劍-建國劍：世界の至寶-流星刀. 天界 1941, 21(237): 80-83

ISSUE DATE:

1941-02-01

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/168134>

RIGHT:

天降の靈劍——建國劍

——世界の至寶——流星刀——

村 山 翠 溪

は し が き

昭和12年は肇國の天皇神武聖帝が熊野の荒坂の津に最終の敵前御上陸あそばされた年——皇紀前3年——より數へて正に2600年である。

聖蹟荒坂の津の位置は古來諸説紛々として定らず、聖蹟の爭奪戦は頼母しくも紀伊沿岸の各所に熾烈を極めたものであつた。偶々三重縣史蹟調査員木田氏の慫慂もあつたので、其の秋、黒潮洗ふ南紀の沿岸一帯に亘つて實地踏査を試み、地理、傳説、出土品等、種々の角度から研究すること十數日、扁舟に棹して熊野灘をも航して見た。かくて現三重縣南牟婁郡荒坂村の二木島こそ先覺者の説の如く有力なる聖蹟なりと考へさせられた。

肇國天皇背日徂 苦航熊野樹宏圖

整軍地點求荒坂 一路親征奠帝都

此の研究旅行中高倉下神が、神武天皇に天降の靈劍^{かみふつ}薙布都を捧げ、皇軍の士氣を鼓舞し奉つた傳説と、富山縣中新川郡白萩村稻に於て發見した隕鐵“白萩號”を資材として謹作せられた御物流星刀と、げにもいみじき奇しき關聯——一は傳説に係る天降の靈劍、一は科學的に立證し得る天降の靈劍にして世界の至寶——此の緣由に對して鮮からざる感興を惹起したといふには餘りに畏れ多い。實は敬虔の念禁する能はざるものがあつたのである。

當時、本題目の下に一文を草して、二三の新聞、雜誌に發表したのであるが、此の隕鐵發見の徑路、位置等に多少の相違あることに疑を存し、實地踏査を行ひ、故老に聽き、口碑に質し、從來、發表せられた諸説の誤れる點をも見出すことを得た。時惟昭和14年の秋、十一月3日菊花薫る明治節であつた。

前日即ち十一月2日には正午過ぎ矢野長官を縣廳に訪問したが、生憎東上御不在であつた。併し知事官房の中川作次郎氏の紹介に依り、郷土研究の高志人社長翁久氏と相談するの機會を得、且同社同人の厚配を受けて大いなる便宜を得た。即ち當日の夕刻同郡の博識にして故老の上市町長平井一見氏を其の私邸に訪れた。暗夜の路次に佇立して門を敲くこと數回、何の應答もなく徒に裏日本に稀れな一碧の大空——天氣靜穩、星斗闌干として輝く——を仰いで歎息するのであつた。折しもあれや、鶯座より射手座に向つて光度實にマイナス四等ともいふべき大流星一つ、靜かに緩かに飛來するのを觀た。恰も明日の明治

節の佳き日の氣象豫報でもあるやうに。果せる哉、翌3日は幸にも快晴に恵まれ、所期の目的を達することが出来た。「はしがき」が長きに失し、更に本論に入るまで、相當の距離はあるが、順序として次の如く記述する。

1. 發 端——日本刀と武裝的平和
2. 上代の靈劍
3. 天降の靈劍——師靈——建國劍
4. 御物流星刀——世界の至寶——上市川隕鐵
5. 雜 俎
6. 結 言

1. 發 端

我が日本民族のなべてが日本刀に對しての信念は上代より現代に至るまで終始一貫、一脈不變であつて、日本刀を單なる物質的武器として尊重するのではなく、破邪顯正の精神的靈寶として信仰するのである。直刀時代より彎刀時代へと型體の上にも、鍛冶の上にも種々なる技術的進歩があり、變遷もあるが、我が國が細戈千足國の名に負ひて、世界に誇るべき超科學的の優秀なる刀劍を量的にも多數に製作したことは固有の民族信仰が其の底流をなして居ることは誰しもが肯定する所である。

日本民族にして初めて知る刀劍の世界——日本刀の威力——一たび腰間に佩びる時悠揚迫らざる安心立命の境地に達し、鞘を拂はずして既に敵を呑むの概がある。若し夫れ光芒一閃すれば、如何なる惡魔羅刹も雲散霧消するのである。然れども「容易に汚す勿れ日本刀」こそ我が民族信念である。「武裝的平和」が我が邦古來の國策で、我が民族精神は日本刀に依つて象徵せられて居ると考へて毫も誤りはない。

重ねて曰ふ。吾人は日本刀に對して、利鈍といふやうな實用的條件を超越したる一種の神聖なる威力を衷心より感知する。誰か感知せざる者あらんや。さればこそ、日本刀が御靈代として、神々しくも神社に祭祀せられ、鎮護國家を祈請し、又下々の民家に於ても、一口は家傳の寶刀として、將又、祖先の靈の籠れるものとして、之を尊重保存する習俗を馴致した。「殉國の劍は乃父より傳ふ」の如し。又彼の古墳内より隨所に出土する刀劍若くはその模造品は遺骸除魔の信仰に出でたものである。

支那事變勃發以來、日本刀尊重熱が急激に高まつたのも蓋し如上の思想が其の根柢をなして居ることは誰しも想到する所である。進歩に進歩を重ねた近代兵器に對しては、超近代兵器を以て應じなければならぬ事は勿論ではあるが、徹底的には日本刀に潜在せる威力を用ひねばならぬ場合の多いことは今事變に於ても確かに顯現せられ居る。

2. 上代の靈劍

素戔鳴尊が天十握劍を以て、彼の出雲の川上に於て八岐の大蛇（ト・テミズムの酋長？）を斬らせ給へる劍は有名な蛇龜正（おろちのあらまさ）、一名蛇之韓鋤之劍（おろちのからさびのつるぎ）、又の名天之蠅斬之劍（あめのはへきりのつるぎ）とも天之羽々斬之劍（あめのはきりのつるぎ）とも稱せられて、神代既に優秀なる刀劍のあつた事を示すものである。此の劍は後に石上神宮（大和にある官幣大社）に納められたといふ。

素尊が此の大蛇より獲給ひし叢雲劍は三種の神器の一で、神劍といへば此の劍を指し奉るのである。日本武尊の御使用に依つて靈驗を現し、草那藝之大刀（記）とも草薙劍（紀）とも申し奉るやうになつた。これこそ、當代無比の名劍であつたに相違ない。由來、出雲簸ノ川上流は中國地方の主要なる砂鐵の生産地である。故に此の地方に此の靈劍があつたことは想像するに難くない。

次の「出雲覽古」の三五七言詩には大いなる含蓄がある。吟誦して餘韻を掬すべきか。

叢雲劍 八雲歌

叢雲護皇統 八雲傳國華

神州正氣文與武 彩雲深處舊山河

更に彼の味耜高彥根神が天稚彥の喪屋を寸斷せられた名劍大葉刈（おほはかり）又の名神戸劍（かんとのつるぎ）の傳説も上代優秀なる刀劍が相當にあつた事を物語るものである。

3. 天降靈劍——建國劍

諸冊二神が國稚く浮脂の如く水母なす漂へる此の大八州を修理固成せられ、其の功全く完了したる後、迦具土の神の御出世に絡り冊神が神去り給ふた。諸神之を恨として、迦具土神を斬り給ふた十握劍——此の劍の名こそ、天尾羽張（あめのをはり）又伊都尾羽張、稜威尾羽張、嚴尾羽張（いつのをはり）と申し奉るのである。

彼の武甕槌神が天照大神の命のまにまに大國主命をして葦原の中つ國を皇孫に奉らしめる時に、高木神より授けられた劍は實に之である。此の劍の名は更に甕布都（かめふつ）、布都御魂の劍（ふつのみたまのつるぎ）、佐士布都の御靈（さしふつのみたま）とも申し奉るのである。甕布都は甕が“フツ”と切り得るの意、布都は即ち“フツ”と切斷する音を寫したものである。佐士は無論刺の義である。

さて此の平國の劍を佩きて、武甕槌神が出雲稻佐の濱に刀身を倒に立て其の前に座して國議りの交渉に大見得を切られたのである。光芒電閃、夏猶寒き靈劍の神祕の匂ひは濱の浪秀にもまして炫いたであらう。劍の威徳と武神の勇

氣凛々たる御態度とに依り此の重大事件も簡単に解決したのである。

時は移る——神武天皇御東遷の際——此の靈劍が更に威力を顯現したことは國譲りに依つて一層神聖化せられた事にも由るのである。

(紀) 天皇獨與皇子手研耳尊 帥軍而進至熊野荒坂津……神吐毒氣、人物咸瘁由是皇軍不能復振時、彼處有人號曰熊野高倉下……時武甕雷神登謂高倉下曰予劍號曰部靈(赴屠能瀬多磨)今當置汝庫裏 宜取而獻之天孫……

此の劍は武甕槌神が前に平國の劍として出雲にて用ひ給ひしものである。神武天皇熊野御上陸後の苦戦を天神が聽召され、武甕槌神を應援の爲に派遣すべく命ぜられたが、神は「僕降らずとも平國の横刀あり、之を天降せば可なり」と云つて天降させられ高倉下神を通じて天皇に奉獻したのである。斯くて

于時天皇適寐。忽然而寤之曰。予何長眠苦此乎。尋中毒士卒。悉復醒起。の如く皇軍將卒勇氣勃々、之より峻嶺高峰の間の石の根木の根踏みさくみて行く行く途を拓きつゝ、非常の辛苦を嘗めさせられつゝ遂に橿原奠都の大業を完成せられ、天業恢弘、八紘一字の大理想を顯現し給ふたのである。此の時の横刀こそ建國の劍と申し奉つて然かあるべきか。

崇神の朝、此の横刀は大和丹波市布留なる石上神宮に奉祀せらるゝに至つた。同社の御靈代として齋き祀られて居るのである。爾來此の神宮は武器の庫とも申すべき程に多數の寶刀が藏められ、神寶として神聖化したる名刀が古來有事の際には幾度か武士の手に渡り、其の威力を發揮したのであつた。

因に當神宮に於ては毎年六月、晦神劍渡御の儀式がある。部靈の劍が高倉下を祭神とせる末社神田神社に渡御せらるゝのである。現今では之を畏多しとして神寶七枝鉾又六叉鉾とも稱する神寶を其の代りとして居る。七枝鉾は朝鮮より將來した支那製の鐵刀である。此の儀式は謂ふまでもなく神武天皇熊野御上陸の故事に縁つたものである。又當神宮には上古酒殿用の嚴笠の優れたものが保存せられてある。御大典の庭上に樹てらるゝ萬歲旛の圖案——神武天皇、丹生川上に嚴笠を沈めて戰捷を占はれた故事に由る——は此の笠がモデルとなつて居る。

(續く)

“OKABAYASI-HONDA” 彗星

昨年の秋、倉敷天文臺の岡林滋樹氏と、黃道光觀測所の本田實氏とが同じ一新彗星を發見した事が、電文の誤り其の他に、長い間“OKABAYATSI (OKAVAYASI)”彗星といふ風に歐米では誤記されてゐたが、山本博士の書翰が届いたので、去る十二月以來は正しく“OKABAYASI-HONDA”彗星と呼ばれるやうになつた。